

都市空間とジェンダー —— 「居住空間」の形成とその構造——

Urban Space and Gender: Constructing a "Habitat Space"

影山穂波 Honami KAGEYAMA

第1章 序

- 第1節 問題の所在
 - 第2節 研究の目的
 - 第3節 研究の対象と研究の方法
 - 第4節 都市地理学における住宅研究の系譜
 - 第5節 フェミニスト地理学における都市空間研究の系譜
 - 第6節 再生産空間とジェンダー
 - 第7節 本論文の構成
- 第2章 東京における住宅供給の変遷
- 第1節 大正末期から昭和初期の住宅供給
 - 第2節 戦時期の住宅供給
 - 第3節 戦後の住宅供給
 - 第4節 東京における住宅供給の変遷

第3章 大正期「職業婦人」の登場と再生産空間の模索

- 第1節 東京市区別にみる性による差異
- 第2節 「職業婦人」の登場と就労形態
- 第3節 大正期の文化運動と女性の位置
- 第4節 大正期における再生産空間の模索

第4章 同潤会の提供した住宅

- 第1節 同潤会の概要
- 第2節 同潤会の住宅事業
- 第3節 同潤会の福祉施設
- 第4節 同潤会の提供した住宅

第5章 大塚女子アパートにおける「居住空間」

- 第1節 同潤会による大塚女子アパートの建設
- 第2節 大塚女子アパートをめぐる権力とまなざし
- 第3節 大塚女子アパートの変遷
- 第4節 大塚女子アパートにおける「居住空間」の形成

第6章 郊外住宅としてのニュータウンの成立とその問題点

- 第1節 日本におけるニュータウン開発と問題点
- 第2節 港北ニュータウンの概要
- 第3節 ジェンダーの視点でみたニュータウン

開発

第7章 港北ニュータウンにおける居住者の日常生活

- 第1節 ニュータウン居住者の属性
- 第2節 地域活動参加者の生活空間
- 第3節 居住者の生活空間と地域活動

第8章 港北ニュータウンにおける「居住空間」の形成

- 第1節 港北ニュータウン荏田地区の地域活動
- 第2節 地域活動が構築する空間
- 第3節 活動参加にみられるジェンダーによる差異
- 第4節 港北ニュータウンにおける「居住空間」の形成

第9章 結語

本論文では、近代以降の都市空間とジェンダーの問題を「居住空間」の概念でとらえて論じるために、近代以降の東京という都市空間を選定し、2つの目的を設定した。第1の目的は、都市空間がいかに関係から検討することである。第2の目的は、「居住空間」において女性が行為主体として空間を形成していくダイナミズムを明らかにすることである。これらの意義は、都市地理学研究をジェンダーの視点から再検討すると同時に、ジェンダー研究に対しては空間概念の導入を図ることにある。なお本論でキーワードとしている「居住空間」とは、「生産と再生産を空間的に結合する行為主体としてくまう>人々が、住宅地を基盤としながら、それを文化的・社会的に創造しつづける空間」であり、生産空間と再生産空間が接合された空間である。そして生産空間とは「財・サービスの生産および労働力の再生産が行われる空間」であり、再生産空間は「もっぱら労働力の再生産が行われる空間」である。

第1の目的を達成する過程では、従来の都市地理学に対する方法論上の批判にもとづき、本研究

で課題とする「居住空間」の形成と構造を明らかにした。近代の資本主義的生産様式のもとでは、生産空間と再生産空間は接合されているにもかかわらず、その機能が分化することで空間も分離されるとみなされてきた。そして再生産労働を担うべき存在として女性たちを位置づけてきたイデオロギーが、家父長制であった。都市地理学をはじめ社会科学的研究は、一般に生産空間から分離した存在とされてきた再生産空間に注目することはなく、都市空間において機能している家父長制的権力を明らかにすることもなかった。これらの研究では、再生産労働が女性の役割と位置づけられており、彼女たちが空間形成主体とみなされることはなかったのである。しかし彼女たちの日常の行動は、再生産労働に限定されることなく、生産労働や社会・地域における多様な活動に展開されている。そこで本論文では、この再生産空間と生産空間との接合される空間として「居住空間」をとらえ、大塚女子アパートと港北ニュータウンの2つの事例研究を通して、都市空間がジェンダー化される過程を明らかにした。前者は、大正・昭和初期において再生産空間が生産空間から分離されたものとして創出された新中間層を対象とした住宅の中でも、とくに女性だけが「住まう」ことで、生産空間に身を置きながら、再生産空間に隔離された「職業婦人」のためのアパートである。後者は、高度経済成長期以降、生産空間から切り離され、再生産空間として広がっていった郊外住宅に囲い込まれた専業主婦が「住まう」空間である。

第2章では、近代の都市空間が、二元論的認識から生産空間と再生産空間とに分離されるものとみなされ、それぞれの空間が機能に応じて価値づけられていった過程を、供給された住宅の機能と形態から検討した。家事・育児をはじめとする再生産労働は、近代以前より女性の役割として位置づけられていたが、近代に入り空間的に生産労働と再生産労働とが分離したときに、再生産労働を担う空間としての再生産空間が明確に表出した。これが近代都市空間の特徴である。

第3章では、大正期に創出された再生産空間としての住宅の社会的・思想的背景を検討した。大正末期から昭和初期は、都市の新中間層として女性が自立した職業に就き、社会に進出していった時代であり、また再生産労働の場としての住宅が模索された時代でもある。すなわち住宅を供給す

る主体が再生産労働をいかにとらえるか考察を重ね、再生産空間を模索したのである。森本厚吉をはじめ、「文化」指向の人々もこの議論に加わっていた。これは人々が空間を形成する過程であり、その結果立ち現れた建造環境のひとつが文化アパートであった。

第4章では、関東大震災罹災者への住宅供給を目的として発足した同潤会の住宅事業を検討することで、同潤会が再生産空間をいかに形成しようと試み、その結果いかなる住宅を供給したのかを検討した。同潤会は、新しい生活様式を提示する役割を果たす一方で、多機能的な居住のための空間を、再生産を行う空間として提供していった。同潤会の住宅は、文化アパート同様、性別役割分業を前提とはしているものの、再生産労働に対する改善が試みられていた。また収入階層別に事業を展開することで、階級によるすみわけという結果をもたらした。

第5章では、同潤会が勤労単身女性のために建設した唯一の事例である大塚女子アパートを研究対象に、「居住空間」がどのように構築されていったのかを検討した。大塚女子アパートは、女性たちが大正末期に急速に社会進出したことに呼応して、創出された空間であった。勤労単身女性のための空間が建造環境として現れたことは画期的であったが、それはあくまでも結婚までの通過地点としての場所の提供であった。つまり自立した生活を可能とする勤労女性は例外的存在であったため、大塚女子アパートは、結婚前の彼女たちを「守る」ことに主眼をおき、地域から隔離するジェンダー化された空間として建設されたのである。大塚女子アパートの居住者たちは、女性としては高収入の「職業婦人」であり、新しい女性像を呈していた。それは彼女たちにとってアイデンティティ形成の重要な要因となり、同時に大塚女子アパートの居住者であることも、自らの社会的地位を表明することとなった。新中間層となった俸給生活者である彼女たちは、男性よりも低賃金ではあるものの、男性なみの働きを要求され、実際それに応える形で就労していた。つまり彼女たちは、行為主体として生産空間の形成に寄与していた。そして大塚女子アパートは、日中は外で働き、夜は寝るための住宅として設計された。そのため、食堂の設置などにより家事の社会化がはかられ、働きやすい環境が提供されていた。しかし、部屋

では調理ができない、洗濯場所が狭い等、身体のみを再生産を居住者に強制したという意味で、権力が想定したライフスタイルを押しつけたものであった。すなわちジェンダー化された空間だった。一方で、彼女たちは自ら自治会を作り、時に集会を開くことで、押しつけられた空間に対して、行為主体として自分たちの「居住空間」を創造していった。

太平洋戦争により、大塚女子アパート居住者のライフスタイルは大きく変貌した。身体を再生産が重視されてきた住宅が、サービスの停止などにより純粋な再生産労働の場に変容したのである。多くの女性たちが就労を続けていたので、彼女たちはすべての再生産労働を、自ら行わなければならなくなった。戦後になっても、生産空間と再生産空間とのせめぎあいの中で、大塚女子アパートは管理主体（戦後東京都に移管）から改修すべき建物とみなされず、勤労女性の住宅としても注目されなくなっていった。女性が急速に社会に進出していった時代に、「職業婦人」のための先進的住宅と位置づけられた大塚女子アパートとその居住者は、時代の変化に適應せざるを得ない状況におかれた。このことは女性たちが時代に自らを合わせることを求められた一つの事例であり、勤労女性に対して機能した、資本の論理の帰結といえよう。

大塚女子アパートに見られたように、大正・昭和期において、「職業婦人」の生活する住宅は、いわば地域から隔離された空間として作られたが、高度経済成長期に大衆化した専業主婦の生活する住宅は、再生産空間として設定された郊外に囲い込まれた。第6章以下では、高度経済成長期およびそれ以降の時代において、中間層として登場してきた女性たちがおかれた状況を、港北ニュータウンの事例から検討した。高度経済成長期に急速な郊外化が進行した結果、主婦が大衆化し、同時に彼女たちは、生産空間から分離されジェンダー化された再生産空間に囲い込まれていったのである。

第6章では、高度経済成長期以降に職住の空間的分離が促進されたことにより、生産機能から切り離され再生産機能に特化した場所として、すなわち生産空間から分離した再生産空間として創出された郊外ニュータウンが、どのように開発されてきたのかを港北ニュータウンの事例より検討し

た。地権者は、港北ニュータウン開発に関わる過程で、地域を形成する行為主体として自覚するようになった。一方、実際の開発過程における「市民参加」は、あくまでも男性が中心であり、女性の姿はなかなか見えてこなかった。開発の合意形成には世帯主である地権者の参加が前提となることが多く、女性たちは排除されていた。

第7章では、再生産空間として開発された港北ニュータウンに、新たに入居してきた居住者の生活空間を検討した。専業主婦率の高さが示すように、生産空間から分離した再生産空間として成立した港北ニュータウンは、再生産労働に位置づけられた女性たちを、生産労働から疎外する役割を果たしていた。また住宅選択の際に、通勤などのアクセスは重要視されるが、購買などの世帯主とその生産空間に関わらないアクセスは劣位におかれ、主要アクセスから疎外された主婦は再生産空間に規定されることとなった。まさにジェンダー化され、それが固定化された空間となっていた。

第8章では、地域活動を事例に、港北ニュータウンにおける「居住空間」の形成を検討した。その結果、地域活動を通じて活動参加者が生産空間を見出し、行為主体として生産空間と再生産空間とを接合して「居住空間」を創造していることがわかった。しかし主婦がこうした活動に参加するには、夫の許可が必要であり、夫との関係において時間的制約が生じることを調査対象者のほぼ全員が指摘した。個人が行動を規制される関係、すなわち権力関係は、家父長制として、港北ニュータウンにおいても機能し続けていたのである。

再生産労働を女性に担わせることを前提に、再生産空間を生産空間から分離するために設定された住宅は、女性を囲い込む。大塚女子アパートでは勤労単身女性の住宅として、港北ニュータウンでは主要アクセスから疎外される再生産空間として、女性を囲い込んだ。このイデオロギーは家父長制なのである。ただし生産空間と再生産空間との接合関係により、ジェンダー化される空間の形態は異なっていた。

以上が第1の目的に対する結論である。次に第2の目的として、生産空間と再生産空間それぞれに位置づけられた女性たちが、行為主体として空間を形成しているダイナミズムを論じた。

大塚女子アパートは、同潤会によって管理された、ジェンダー化された空間であったが、「職業

婦人」として働く女性たちは、自らの生活を守るために自治会を形成し、また居住者が議論をしたり交流会を開いたりしてネットワークを築くなかで、行為主体として「居住空間」を創造していた。しかし管理形態が変化し入居者間の所得に差異が生じるにつれ、彼女たちのつながりは点と点との関係に変わっていった。このアパートの管理体制や物的環境は、時代に応じて変化を余儀なくされており、同時に女性たちのおかれた位置を反映したものであった。しかし彼女たちは、置かれた状況が許さざり、自らの意志で自らの生活を選択していったといえる。移管問題、鍵の管理などの問題が生じると居住者は団結して行動し、行為主体として意志決定をしている。これは居住者がジェンダー化された空間を組み替えていく過程でもある。自らの安全性を守るべく生活を営んできた居住者は、自分たちで「居住空間」を形成していったといえよう。

港北ニュータウンの事例では、専業主婦は再生産空間として設定された住宅地に囲い込まれていたが、彼女たちにとって専業主婦であることはアイデンティティ形成の要因ともなっていた。妻、あるいは母でしかないということは、実は自らのアイデンティティを疎外していることであると気がついた主婦は、再生産空間で作られられてきたアイデンティティの脱構築を図った。その行為が従来の空間に対する異議申し立てとなり、新たな空間を生み出す力となっていった。女性たちは再生産空間に閉じ込められたがゆえに、そこからの解放を求めたといえる。そして彼女たちが行為主体として展開する地域活動を通して、「居住空間」が再構築されていった。例えば、地区センター建設やバス運行時間改定などの物的空間の形成に彼女たちは関与し、また周囲をまきこんで人的ネットワークの形成に寄与している。介護活動では財・サービスの生産が行われ、またイベント活動においても生産空間が見出され接合されている。イベント活動では女性だけではなく、男性が加わることで、新たな可能性が開かれてきている。これらの成果は女性たちが中心となった「居住空間」からの発信にあり、またそれを通じて、従来の関係性を変えていく力になりうることにある。その結果、「居住空間」におけるジェンダー関係も少しずつ形を変えてきている。

建造環境としての都市住宅は近代の産物である。

そして女性たちが再生産空間に位置づけられる状況を投影した空間が生み出されてきた。その空間を構築していくのは居住者である。居住者は、ジェンダー化された再生産空間として創出された住宅をただ受容し固定化するのではなく、自ら行為主体となっていった。この過程が、「居住空間」を創造する過程であり、またジェンダー化された空間を組み替えていく過程であった。

都市空間が形成される過程では、ジェンダーという権力関係が組み込まれている。しかし都市空間における生産・再生産の関係性を行為主体が組み換えることによって、その空間は再構築されていくのである。

初出誌一覧

- 影山穂波 (1994) 港北ニュータウンにおける住民主体の地域形成—ジェンダーの視点から—。お茶の水地理, 35, 23-37.
- 影山穂波 (1996) 港北ニュータウンにおける地域活動の展開。お茶の水女子大学人間文化研究年報, 19, 143-150.
- 影山穂波 (1997) 都市における単身女性の居住空間の変容—同潤会大塚女子アパートの事例から—。お茶の水女子大学人間文化研究年報, 20, 125-133.
- 影山穂波 (1998) ジェンダーの視点から見た港北ニュータウンにおける居住空間の形成。地理学評論, 71A, 639-660.
- 影山穂波 (2000) 同潤会住宅にみる「すまい」に関する一考察。お茶の水地理, 41, 9-17.
- 影山穂波 (2000) 地域活動にみる郊外居住—ジェンダーの視点から—。都市住宅学, 30, 19-25.
- 影山穂波 (2000) 1930年代におけるジェンダー化された空間—同潤会大塚女子アパート—。人文地理, 52, 321-341.

1994年4月お茶の水女子大学大学院・人間文化研究科比較文化学専攻入学。お茶の水女子大学助手を経て、2001年4月より椋山女学園大学文学部専任講師。

honami@lit.sugiyama-u.ac.jp